

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年9月29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 人文科学研究所

職 名 教 授

氏 名 WITTERN, Christian (ウィッテルン・クリスティアン)

助成の種類	平成27年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 国際会議開催助成		
事業内容	2015年度日本デジタル・ヒューマニティーズ国際シンポジウム(JADH2015) Japanese Association for Digital Humanities Conference 2015		
開催期間	平成27年 9月 1日 ～ 平成27年 9月 3日		
開催場所	京都大学 人文科学研究所 本館共通講義室		
参加者	総数 65名	内訳 海外からの参加者(10か国):23名、国内参加者:42名 (アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、イギリス、ドイツ、オーストリア、ノルウェイ、台湾、韓国、ポーランド)	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(予稿集[英語])		
会計報告	事業に要した経費総額	2,146,036 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 京都大学人文科学研究所 共同利用・共同研究拠点、東京大学	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	招聘交通費	1,537,747	1,000,000
	宣伝費用	103,108	0
	プログラム印刷代	221,401	0
	看板代	44,639	0
	ポスターパネル 設営、撤収	45,361	0
アルバイト謝金	187,272	0	
茶代	6,508	0	
計	2,146,036	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

成果の概要／クリスティアン・ウィッテルン

2015年9月1日から3日までの三日間にわたり、京都大学人文科学研究所において、日本デジタル・ヒューマニティーズ学会(Japanese Association for Digital Humanities, JADH)の国際学会 JADH2015 を開催した。特に問題も無く、無事に全ての日程を終了することができて、関係者一同を代表してご支援頂いたことに対して、あつく御礼を申し上げます。

JADH の国際学会は人文社会学系、情報学、図書館学など日本国内の研究者と海外のデジタル・ヒューマニティーズ(DH)における先進的な研究者の交流を企図し、2011年の創立シンポジウム以来、大阪大学(2011)、東京大学(2012)、立命館大学(2013)、筑波大学(2014)の開催を経て、今年の京都大会に臨んだ。今年は「Encoding Cultural Resources, 文化資源をエンコードする」を大会のメインテーマとした。インターネット時代に文化資源をどういう形で扱うべきか、どういう形で研究に適切な分析が可能になるかなどの問題について、幅広く研究者に研究発表の申し込み(CFP)を呼びかけた。発表申し込みの概要論文に基づき、プログラム委員会(委員長:三宅真紀大阪大学准教授)が査読者を決めて、査読結果に基づいて検討を行った。その結果、20本の研究発表と3本のポスター発表が選定された。これに加えて、実行委員会が海外のDHコミュニティーの中から、このテーマに関して特に優れた実績のある研究者・実践者を選んで、基調講演者として招聘した。

初日はワークショップとPublic lecture(公開講演)、二日目から研究発表、二つの基調講演、ポスター発表とクロージング講演の構成で学術プログラムの委員会がプログラムを組んだ。初日に開催したワークショップ「MemoryHunt」では、世界各地の資料館などからウェブで公開中の歴史的な写真をスマホのアプリで現在その場所に有る風景をカメラで撮影して、画面に再生するという作業に取り組み、京大構内の建物などを調べた。ポーランドからの参加者が中学生三人を同行してくるという予想外の出来事があったが、子供達も楽しそうに古い写真と現状を見比べてワークショップに参加していた。もう一つのワークショップでは、人文科学の分野で一番広く使われているエンコーディングの手法である「TEI」を紹介し、主に文献学に関するデジタル化の手法について学ぶ機会となった。

初日の夕方にPip Wilcox氏(オックスフォード大学ボドリアン図書館)を講師として「デジタルアーカイブと図書館 —シェイクスピア資料のデジタル化を通じて」という講演が行われた。この講演は学会登録者以外の一般参加者も聴講可能とし、70名以上の参加があった。

二日目には正式な研究発表とポスター発表を実施した。午後のWendell Piez氏(Piez Consulting)による「The Craft of XML, 工芸としてのXML」という講演では、XMLの

仕組みについて示唆に富んだ発表があった。その後にポスター発表で、より密接な、分野を超えた交流が行われた。

三日目の基調講演は Øyvind Eide (Univ. of Passau, ドイツ) 氏により「The Text is Not the Map -- Using Conceptual Modelling to Understand the Non-Mappable Aspects of Narrative, テキストは地図ではない - コンセプトのモデリングを通じて物語の地図化不能な部分の理解」について講演が行われた。最後に DH の国際連盟である ADHO の元会長 Harold Short 氏 (Kings College, London) による、学会の全体と国際 DH の動きについての講演があった。講演の中で今回の大会で若手研究者の比率が特に高いことについて Short 教授が喜びを示した。言語学や文学研究は従来通り発表が有ったが、音楽分析、ネットワーク分析、ソフトウェア開発、マテリアル・カルチャー、アート・ヒストリー、コミュニケーションなど、今までなかったテーマや分野への新たな展開も示された。

大会を通じての参加者は 65 名に及んだ。内訳は、海外 10 ヶ国から 23 名、日本からの参加者は 42 名である。今回はポーランドから 5 名、韓国から 2 名の参加があり、何れもその国から始めの参加であった。それ以外はアメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、イギリス、ドイツ、オーストリア、ノルウエイ、台湾から例年通りの参加があった。全体としても今回は海外からの参加者数が今までの大会で一番多かったが、女性研究者による発表も過去最大だった。

京都大学 人文科学研究所 教授
JADH2015 実行委員長

Christian Wittern